

第2回 三重県 グリーン・ツーリズムネットワーク大会

大会テーマ

地域のネットワーク化と魅力作り
～香る道・ルート166～

in 松阪

報告書



◆開催日 平成25年10月22日(火)～23日(水)

◆主会場 松阪市飯南産業文化センター

主催 三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会実行委員会、三重県

共催 ネットワークルート166

後援 松阪市 一般社団法人松阪市観光協会

NPO法人日本グリーン・ツーリズムネットワークセンター

目 次

開催概要	2
開会式	3
分科会	4
交流会	7
基調講演	8
パネルディスカッション	10
大会宣言	13
おわりに	14

開催概要

■開催趣旨

昨年度、第1回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会を開催し、多くのグリーン・ツーリズム実践者が、情報交換や議論を通して交流を深めました。そして三重県の農山漁村資源の素晴らしさと、その資源を活かしたグリーン・ツーリズムの魅力について再認識しました。

この取り組みを発展させ、実践者の連携・交流をさらに深めるとともに、新たな魅力を県内外へ情報発信していくため、第2回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会を開催しました。

■開催日 平成25年10月22日（火）～23日（水）

■主会場 松阪市飯南産業文化センター

■主催 三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会実行委員会、三重県

■共催 ネットワークルート166

■後援 松阪市 一般社団法人松阪市観光協会
NPO法人日本グリーン・ツーリズムネットワークセンター

■参加者 115名

■大会プログラム

10月22日（火）

13：15 開会式（飯南産業文化センター）

13：30 オリエンテーション

13：40 分科会

第1分科会（波瀬地区）

第2分科会（松阪地区）

第3文科会（飯南・飯高地区）

18：30 交流会（リバーサイド茶倉）

10月23日（水）

9：30 実行委員長あいさつ（飯南産業文化センター）

9：35 基調講演

10：40 分科会報告

11：40 パネルディスカッション

12：25 大会宣言

開 会 式

大会の開催にあたり主催者のあいさつに引き続き、来賓の松阪市長からあいさつをいただきました。

■主催者あいさつ

三重県農林水産部農業基盤整備課長 西村和人

三重県では、「みえ県民カビジョン」のもと、「幸福実感日本一」への挑戦を合い言葉に施策を展開しておりますが、このグリーン・ツーリズムのフィールドが、まさに県民のみなさまとともに、新しい三重を生み出す場となるよう、がんばっていきたいと思っております。

今回の大会テーマが示す通り、地域をつなぐことで生まれる相乗効果を大会の成果として期待しています。実行委員をお受けいただき、大会テーマの由来ともなっている「ネットワークルート166」は、その中でもひとつのお手本となる活動だと思っております。大会をとおして、よりよい交流、より深い議論を繰り広げていただくよう期待しております。
(農地・水保全班長代読)



会場風景

■来賓あいさつ

松阪市長 山中光茂さま

松阪市は面積が東京23区と同じですが、その中に海から山まで多様な地域があります。そして、それぞれの地域に特徴ある活動があります。たとえば雑草でしかなかったクレソンを使った地域興しはその代表例。今回の分科会にも取り入れられている波瀬地域は、そのクレソンも使って地域興しに取り組んだ結果、豊かなむらづくり全国表彰で、全国第3席の賞をいただきました。

みなさんが取り組んでいるグリーン・ツーリズムは、無理して作るものではなく、地域住民の活動、まちづくりの結果であるものと思います。松阪にも、そのような取り組みがたくさんあるので、今後も松阪へ来て交流を続けていただきたいと思います。



松阪市 山中光茂市長

分科会

3つの分科会に別れ、それぞれ有意義な視察と意見交換が行われました。

■第1分科会（波瀬地区）

山間部の地域おこし

クレソン畑、虹の泉、旧紀州街道、グリーンライフ山林舎、グリーンライフやまびこ、波瀬植物園、波瀬ゆり館（旧波瀬小学校）

「こんな隠れ里があるとは思わなかった」、「暮らしの中に美しさを見つけられる」、「写生をしたくなるようなしっとりとした奥座敷」など、波瀬を訪れた参加者からは、驚きの声がたくさん聞かれました。しかし、波瀬のすばらしさは、単に自然が豊かなことだけではありません。大会直前に、平成25年度豊かなむらづくり全国表彰で全国第3席の受賞が発表されたことからわかるように、そこに住む人々の活動すばらしさにも注目が集まる分科会でした。



クレソン畑の見学

クレソン畑や、グリーンライフ山林舎、波瀬植物園などをめぐり、趣のある旧波瀬小学校の校舎でクレソンうどん打ちやでんがら作りの体験をするコースでした。

かつて栄えた林業が落ち込み、過疎化が進んだこの地域ですが、自然豊かなフィールドを活かした地域おこしに取り組み、1ターンの移住者も13組を受け入れています。最近では、自生していたクレソンを使った商品の知名度が高まってきました。地元の参加者からは、遠いところにもかかわらず「よいところだからわざわざ来てくれたと思えるようになった」と、自信にあふれるコメントもありました。

参加された基調講演の野口講師からは、今後も人との交流大切にし、地域住民が暮らしの中で何をを目指すのか、みんなで意見を出してみたらどうかとアドバイスをいただきました。



意見交換会



「波瀬のゆりを咲かそう」



地元特産品のでんがら作り

■第2分科会（松阪地区）

松阪の農・食・人づくり

うきさとむら、松阪市森林公園、松阪農業公園ベルファーム、みえこどもの城



地元こだわるベルファーム



体験し学ぶ場を提供する森林公園

地域づくりの取り組みで有名なうきさとむらや、松阪農業公園ベルファーム、松阪市森林公園をめぐり、県立みえこどもの城の活動事例も紹介する分科会でした。テーマは「松阪の農・食・人づくり」です。テーマからも分かるとおり、この地域の施設では、地元の農産物を活かすため直売所を開設したり、地元食材を使った料理の提供などに取り組んでいます。

テーマの中でも、特に話題に上がったのが人づくりです。ベルファームは、地元のことを理解し、自分なりに伝えられるスタッフを育てようとしています。森林公園では、来場する親や教師に着目し、失敗しながらも子どもと一緒に試行錯誤するキャンプ体験を提供しています。うきさとむらは、公的な補助金を使わず、昔から自主的な活動を続けている地域の人々の取り組みが参加者の関心を集めました。みえこどもの城は、フィールドを山や川にも広げ、子どもたちに遊びを教えています。

スタッフ、来場者ともに体験をとおして新しい発見があり、成長がある人づくり。グリーン・ツーリズムのフィールドでこそ実現できるテーマであることを、改めて実感した分科会でした。



こどもの城の取り組み紹介



うきさとむらで、映画ロケ地を見学

■第3分科会（飯南・飯高地区）

地域連携したまちおこし交流施設

深野だんだん田、道の駅飯高駅、深緑茶房、リバーサイド茶倉



リバーサイド茶倉にて意見交換



棚田で地元住民から説明を受ける

深野だんだん田、道の駅飯高駅、深緑茶房、リバーサイド茶倉を見学しました。「地域と連携したまちおこし交流施設」という分科会テーマを設定したコースであったことから、参加者からは、地域の人や資源を活かした施設の活用について、質問や提案が出されました。

例えば飯高駅には、せっかく地元産の粉をつかっているのだから、そば打ちを粉挽きからやる体験はどうか、温泉施設があるのでもっと遅くまで営業してはどうか、駅のスペースを地域住民のふれあいの場として解放してはどうかなどの提案がありました。また、深野だんだん田には、全体がわかるリーフレットのような物があるとよいとの提案もあり、まさに今、地域住民が取り組んでいるマップ作りに通じる内容であったことから、地元にも励みになる意見でした。

深緑茶房に関しては、茶の生産工程が見える工夫をしてはどうかとの問いに、「お茶育」をしたいと考えているとのことで、積極的な取り組みが参加者に伝わるやりとりもありました。このように、事業者としても参考になる意見交換となりました。



飯高駅は道の駅の先駆け



深緑茶房 一杯の茶に込めた思い

交流会

総勢68名が参加した交流会。リバーサイド茶倉のバーベキューハウスで、松阪産の牛肉やホルモン、炭火焼きの天然鮎など、地元の食材をふんだんに使った料理を楽しんでいただきました。

交流会中には、多くの方に舞台上に上がっていただき、自己紹介をしていただきました。ネットワークルート166のスタッフからは、直接、自慢の逸品を提供しました。グリーン・ツーリズムを实践する方同士、満足行く意見交換をしていただけたのではないのでしょうか。この交流の輪が今後も活かされることが、大会の大きな成果になっていくことでしょう。



主催者を代表して三重県農業基盤整備課長のあいさつ



地元松阪市の中村飯南振興局長も参加いただきました



岩手県久慈市からの参加者6名とも大いに交流



ベルファームの栗ジェラードとうきさとむらのからあげ



波瀬のクレソンうどんとでんがらもありました

地元実践者のオリジナル商品コーナーを設けました。みなさんの創意工夫を話しの種に、活発に意見交換しました。



活発な交流で盛り上がる会場の風景です



若者の参加が頼もしい三重県大会でした



参加者自ら後片付けするところもGT大会ならではの

基 調 講 演

演題 「地域資源を連携で活かす“ゆっくり旅”」

演者 野口智子氏

ゆとり研究所代表、NPO法人スローライフ・ジャパン事務局長

要約

①スローライフの考え方が注目されています。

スローライフと対極にあるような大型観光施設では、1,000人単位で風呂に入れますが、湯の温度を上げて早く回転するようにしています。また、海のない県でカニの食べ放題をしている旅館もあります。では、どのようなものがスローライフなのか。それは、私たちが作ったスローライフ曼荼羅（次ページ）を見てもらえば、何がスローで何がファーストかを考える参考になります。

スローライフを唱えています。何もスロー一辺倒を進めているわけではありません。実際、現在スローだけで生活するのは難しい。その時々でスローとファーストを選択しながら生活するのがスローライフです。



スローライフ曼荼羅を説明

②地域資源は多様、編集力が肝心です。



菅島「干す文化」も地域資源

スローライフの考えを示した上で、これまで野口氏がかかわった長野県飯田市、奈良県野迫村、鳥羽市の菅島の例を披露。高野槇をリースに使うなど、地域資源を柔軟な発想でとらえ、商品開発につながる事例を紹介されました。

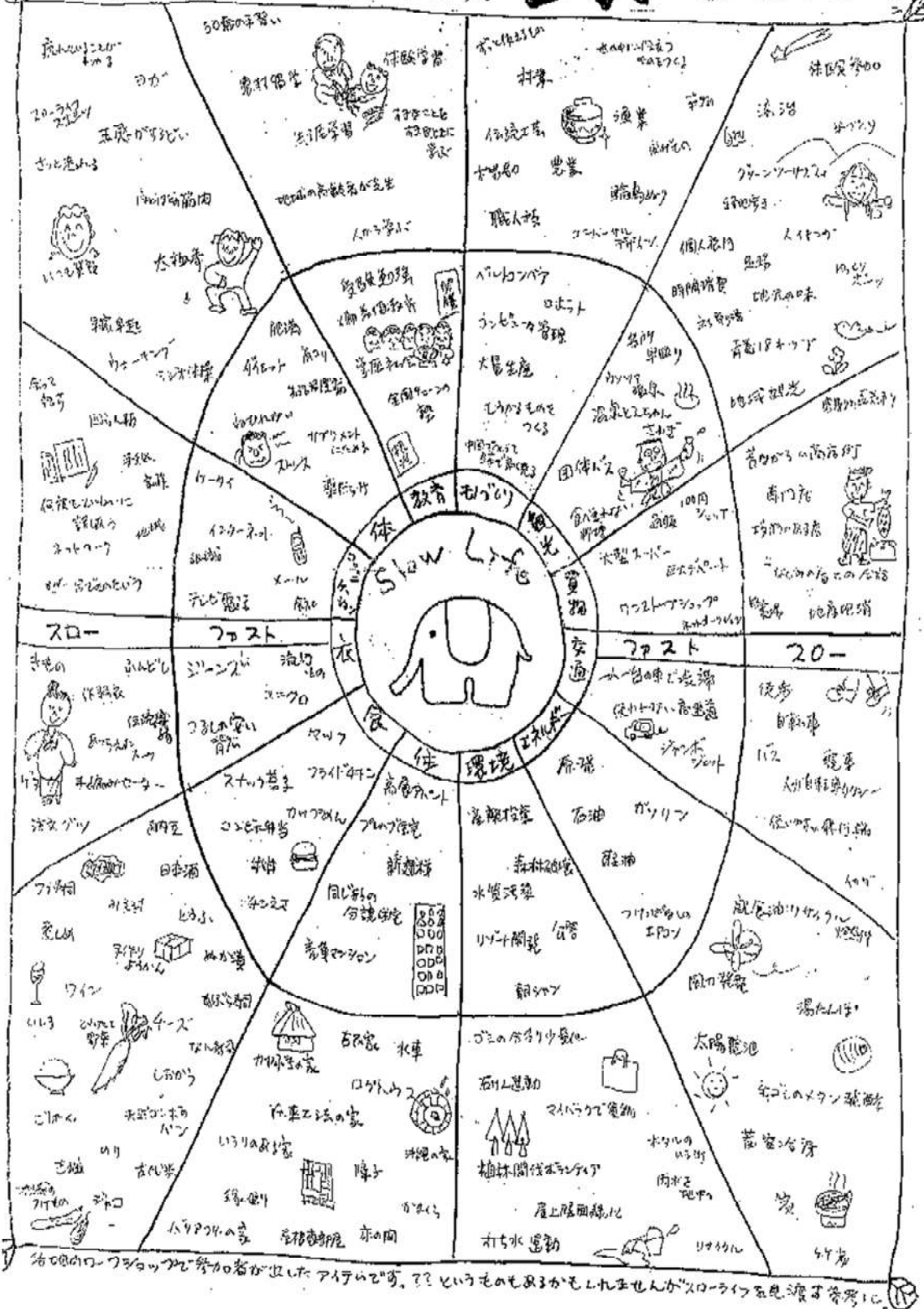
鳥羽市の菅島では、「風の島」と呼ばれるほど風が強いこと、それを活かした「干す文化」などを、どう地域資源として発信していくかを考えています。注目を集めるために究極の干物として、伊勢エビの干物を作ったら好評でした。

③ゆっくり時間を作りましょう。

これらの例を踏まえ、これからの農山漁村に必要なのは、物ではなく文化を提供できるグリーン・ツーリズムであると考えています。体験の羅列だけでは、感動する時間すら失われています。三重県に来たとき、思わず深呼吸してしまうような、そんなグリーン・ツーリズムを提供していけるとよいでしょう。

20-ライフ 曼陀羅

「発見自在、ゆるやかに楽しむ！」



パネルディスカッション

テーマ 三重県のグリーン・ツーリズムネットワーク ～地域をつないで魅力アップ～

■コーディネーター

青木辰司氏

(東洋大学社会学部教授、NPO法人日本グリーン・ツーリズムネットワークセンター代表)

■パネリスト

安村克己氏 (奈良県立大学地域創造学部教授)

向川智之氏 (久慈市産業振興部交流促進課長)

大原興太郎氏 (株式会社松阪協働ファーム代表取締役、三重大学名誉教授)

山本齊氏 (大会実行委員長、リバーサイド茶倉組合理事長)

■アドバイザー

野口智子氏 (ゆとり研究所代表、NPO法人スローライフ・ジャパン事務局長)

青木 この大会をとおして三重県は、グリーン・ツーリズムのポテンシャルの高さ、先進地への歩みを感じている。パネリストのみなさまから、テーマに沿って議論を深めたい。まずは、遠く久慈市からいただいた向川さんから話しを伺いたい。

向川 久慈市は面積が松阪市とほぼ同じだが人口は3万6千人。久慈市でのグリーン・ツーリズムの取り組みは、合併前の平成12年、旧山形村から始まった。95%が山地、人口3千人で、村を元気にするには、外部から人を呼ぶ必要があった。まずは都市部の子どもを受け入れる教育キャンプに始まり、その後、エージェントによる資源の洗い出しをして、教育旅行の誘致を始めた。初めての受入まで5年かかったが、現在では7千人、30校を受け入れている。プログラムは、自然体験と生活文化体験に大別できる。民泊受け入れ施設が90軒あり、分宿して子どもを受け入れている。

青木 久慈市では教育旅行の取り組みが活発。東北では大震災があったが、それを境にして教育旅行は変わったか。また、教育旅行はよいエージェントと組めるかどうかのリスクもある。三重県での取り組みはどうか。

向川 その年は自身の被災を恐れたキャンセルや、ボランティアに行くためのキャンセルが多かった。一方で、民泊を体験した子どもから、心配する問い合わせも多くあった。その後は、震災



コーディネーター
青木氏



パネリスト
向川氏

学習を含めたメニューもできた。

山本 観光には来るが、グリーン・ツーリズム実践地域への立ち寄りはないと感じている。近くの学校がキャンプに来ることはあるが、旅行会社をとおした受入はない。農家民泊も子どもを主には考えていない。

大原 三重県では体験は基本的に日帰りになっている例が多い。旅行会社がかかわるとしても、立ち寄りの観光ルートとして扱われている。

安村 自分はもともとまちづくりをテーマに研究しているが、観光まちづくりという考え方もある。これまでの調査の実感から、人の交流が盛んになっていけば、三重県でも民泊の可能性も出てくると感じている。

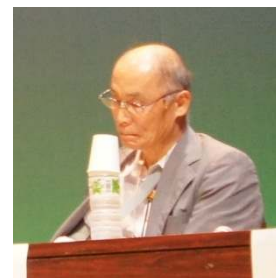
青木 次に、ネットワーク化の意義についてどう考えるか。また、波瀬は昔からの街道があり交流の拠点だったため、開放的な土地という印象を受けたが、三重県のネットワークに歴史などのバックグラウンドはあるか。

山本 お客さんは、1つの施設だけでは満足できないが、ネットワーク化することで、互いの組織を紹介し合い、滞在時間や満足度を向上できる。ネットワークルート166の場合は、大阪方面から伊勢参りする人々が使った道という歴史がある。

大原 観光なども含めて、松阪の施設はつながりが弱いと感じていた。歴史を含め地元のことを学ぶことで、もっと地域の魅力を伝えられるようになると考えている。



パネリスト
山本氏



パネリスト
大原氏



パネリスト
安村氏

安村 奈良県と比べると、三重県の地域連携は規模が小さい印象を受ける。人とつながりを強め、さらに広げていくことができると感じている。

野口 奈良県の川上村は、渓谷の地形なので、必然的にそこを通らざるを得ず、つながってきた歴史がある。松阪や三重は、道も整備されておりいろんな地域とつながりやすく、分科会で見たクレソンなどそれぞれの地域に魅力がある。



アドバイザー
野口氏

向川 久慈市では、個々での取り組みでは限界があるので、「まめぶ作り」、「そば打ち」などの団体のネットワークがあり、それぞれの団体間のネットワークもある。これがうまく機能して、団体の受け入れにつながっている。

青木 分科会に参加して感じたことは、地元住民の生活感が感じられなかった。お茶がどのように作られているのか、棚田がどのように管理されているのかなどが分からなかった。地域住民とのふれあいについて工夫していることはあるか。

山本 リバーサイド茶倉については、市町合併前は地元飯南町の出資者があり、地域の施設という雰囲気があったが、合併後、市が運営した1年半の間にその意識が薄れた。その後、茶倉管理組合が指定管理者になっているが、地元住民の関心はもとに戻っていない。

青木 ルートでつなぐネットワークもあるが、年代、時間をつなぐネットワークもグリーン・ツーリズムを奥深くする。この三重県のグリーン・ツーリズムの大会は若者の参加が多い。これは将来を期待できるのではないか。

大原 歴史と文化を勉強するとき年配の人が語り部として話すことで、若い人が感銘を受けている。若い人も年配の人もお互いに刺激を受けている。交流会の盛り上がりを見ても思った。

安村 学生を現地に連れて行くと非常に感動する。大学がグリーン・ツーリズムにかかわったとき、受け入れてくれる地域があるのはありがたい。そのような経験のなかから1ターンなどが出てくると、時代が変わると感じている。大学生向けの教育旅行も考えられるが、小中学生対象のように画一化したプランを作ることは難しいと思う。

青木 グリーン・ツーリズムの対象を考えると、子ども中心だと風評に弱い面がある。教育旅行が盛んな久慈市でも、大学生など高等教育向けグリーン・ツーリズムに取り組んではどうか。また、三重県でも大人対象のグリーン・ツーリズムを提案していくことが必要ではないか。

安村 グリーン・ツーリズムによるまちおこしの最先端を走っているのは、三重県の中南部や奈良県の南部だと思っている。文明や経済発展の最先端である都会の人々は、世界中の情報を知っていても、自分の家の隣に誰が住んでいるのかも知らない異常な人間関係の中にいる。このように考えると、分科会の中で波瀬地域の発展という言葉が出たが、では、地域の発展とは何か、しっかり考える必要がある。

野口 香る道というテーマはすてき。滞在時間が延びることで、もっといろいろな香りを感じてもらうことができる。生活感のある香りもよい。

青木 野口さんの言うように五感をくすぐることは、大人のツーリズムには必要。また、これからは、来る人と迎える人がフェアな関係、おもてなしと感謝でお互いの活力になるようなフェアツーリズムの考え方も大事。

最後に、いなが廃れていく原因は、外からの風を拒み、外に出て行くことを嫌う閉鎖性にある。外の風を取り入れ、それが地域の土になじむことで風土ができる。ツーリズムを行うことはつながりを作るということをしっかり認識して、今後の取り組みを続けていただきたい。



ディスカッションの様子

大会宣言

豊かな自然と、そこに生きる人々の生活が調和するこの松阪の地において、私たちは第2回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会を開催しました。そして、多くの仲間と語り合い、交流を深めました。

その中で、われわれの取り組みが、地域の人を元気にし、そこを訪れた人に安らぎを与え、そして美しい景観を守っていることを改めて認識しました。今後、この取り組みをますます発展させるため、ここで出会った仲間をはじめ、想いを同じくするグリーン・ツーリズムの実践者とともに、次のことを重点に、より一層の努力をすることを宣言します。

- 一、グリーン・ツーリズム実践者同士をつなぐネットワークを広げ、地域の魅力を高めます。
- 一、農山漁村の豊かな暮らしや文化を再生し、その価値を守っていきます。
- 一、グリーン・ツーリズムに携わる者としての役割を一人一人が認識し、これを果たしていきます。
- 一、グリーン・ツーリズムのサービスの質を高め、地域のビジネスとしての発展を図ります。

平成25年10月23日
第2回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会



大会宣言を読み上げる岡野委員と
ネットワークルート166メンバー

おわりに

2日間にわたり、第2回三重県グリーン・ツーリズムネットワーク大会に参加していただきまして、ありがとうございました。大会を通りして、われわれのグリーン・ツーリズムが発展していくためには、地域のネットワーク、住民とのネットワークを充実していく必要があることを、改めて学びました。もちろん、この大会に参加していただいたみなさまとのネットワークを作っていくことも重要です。今後、この大会が第3回、第4回と続いていくことが、われわれの活動の発展とも考えられます。

来年、この大会でみなさまにお会いできることを祈念して、お礼のあいさつとさせていただきます。



お礼のあいさつを述べる
山本実行委員長

大会アンケート結果（抜粋）

1. 分科会（回答数41）

内容は満足行くものでしたか？

選択肢	回答数
十分満足	22
かなり満足	12
やや不満	3
不満	1

今後の活動に活かせる内容でしたか？

選択肢	回答数
十分活かせる	21
一部活かせる	18
あまり活かさない	1
活かさない	0
わからない	0

2. 基調講演、パネルディスカッション（回答数53）

今後の活動に活かせる内容でしたか？

選択肢	回答数	
	基調講演	パネル
十分活かせる	39	33
一部活かせる	10	15
あまり活かさない	2	1
活かさない	0	0

*設問1、2とも未記入の回答があったため、回答数の合計は一致しません。